

哲學的人間學と幼稚園問題

檜 崎 淺 太 郎

(去る十一月十五日、日本幼稚園協會主催保育談話會に於ける講演の主要筆記であります。文責在筆記者)

教育の事業と感化事業は年々その經驗の重なるに従つて、幼時期と青年期とが人間教育の最も重大な時期であることを、何處の國に於ても、強く感ずる様になつてまゐります。特に亞米利加の最近の研究に見ますと、犯罪者を少くすることは如何にすれば可能であるかといふことを詳しく研究してみると、幼時の悪い習慣がもとになつて犯罪が起る場合が多いから、この幼時の悪習慣の排除がその根本的方法であるといふのが諸學者の結論であります。それで最近には政府が非常な經費を出しまして、小學校幼稚園に於いて、今何んな習慣がついてゐるか、悪い習慣は何うしてついたかといふ習慣の調査をして居ります、そして悪い習慣には悪い習慣のつくような條件が必ずあるのだから、家庭や、學校や社會から、その條件を取り去らうといふような大きな國民運動が起つて居ります。この一事に見るも幼兒教育が何んなに大切であるかが察せられます。それで斯様な方面に日々苦心をされてゐられる幼稚園事業に御

關係の方々に、お話をするには、非常な重大な責任を感じさせられます。堀先生は、私に幼稚園に關する何でもよろしいから話をせよと仰せられました。明日からでも、毎日の保育の上に斯んな點に氣をおつけになればよいといふ様な、適切なお話が出来れば、一番よいと思ひますが、これは私の専門ではありません。私の仕事と趣味の關係から子供に興味を持ちまして、滯歐中いろんな幼稚園を観ましたので、その方面から注意すべき點を申上げるもよろしいが、然しこの方面は既に倉橋先生や堀先生の専門家が十分話されてありますし、私が二年餘の間に見た位では十分でありませんから差控へまして、實際から離れて、歐羅巴の學者の氣持を、保育の實際とは遠い話ですが、お話致さうと思ひます。その學者の氣持の中から一つの新しい學問即ち「哲學的人間學」が生れたといふことになりませんが、その學問が何ういふ事に影響するかに就いて申上げたい。而してこの學問が發展すれば、自づから間接に幼兒教育に影響を與へると思ひます。而してその問題に入る前に、極く簡單に

歐羅巴の幼稚園と日本の幼稚園と比較して如何に違つてゐるか。

日本の文化を發達させるために若し西洋から學ぶとすれば西洋の何れの國から學ぶがよいかこれを話しまして本問題に入ります。

日本の幼稚園と歐米幼稚園

日本の幼稚園と申しましても、私がよく知つて居りますのは關西、特に神戸です。東京は外國から歸りまして堀さんに案内していただいて、こちらを拜見しただけですが、假りに之を代表者として日本の幼稚園といたします。歐米と申しましても、露西亞・獨逸・佛蘭西・亞米利加の各二三の幼稚園の管見に過ぎません。先づ兩者を設備で比べると幾らか違ひはありますが、そんなに違つたものでもありません。日常の保育の仕方にしても、見聞しました結果を報告して明日より斯様になさいと奨めする程のものはありません。小さな事を申せば、ハルビンで露西亞貴族を教育する所をみました時に、セクシヨン・ペーパーを凡る場合に使用して居りました。私は通譯者に「幾何學的の畫の場合はこの紙はよろしいが、自由畫は白い紙に描かせては如何でせうか」と話したことでした。獨逸の南部の幼稚園ではいろいろの國の幼稚な樂器を各兒に一つづ、持たせて、音樂隊遊びをさせてゐました。獨逸は音樂の國と云はれますが、子供が音樂あそびを致して居りました。參觀しました時間は、一同がいろんな原始的な樂器を使つて合奏しました。それ等の各音樂器を合せると面白い調和やメロデーが生まれて、子供は大變に喜んで遊んでゐました。

現在、獨逸の保育思想中には、中心のフレーベルの思想はちつとも變つて居りませんが、それを骨にしてモンテッソリー法を加へ、如何にして二つを結びつけて一貫した保育法にするかを研究し出しました。フレーベルモンテッソリー協會が出来て雑誌バンフレットが出て居ります。ライプチヒの兒童研究

所では、ホルケルト（哲學者ホルケルトの息子）がいろ／＼工夫しました教育玩具で、世界機械展覽會に出品するものだといふのをみまして、私もそれを三組買つてまゐりましたが、日本で造りやすめものと大差ありません。（ビルダーに似た組立玩具）其處ではその玩具を子供に與へて子供が作つて遊ぶ順序を寫眞に撮つて研究して居りました。佛蘭西でも新しい幼稚園教育法はモンテッソーリ法を研突利用し、流行つて居ります。伊太利ではムツソニーが非常に獎勵して居りますので小學校に於ても行はれて居ります。

以上、目に見ました所では變つた事ありません。ですから、日本の現代の保育は歐米に對して大體恥づる所なしと存じますから、諸姉は自信を持つてやつていただいてよろしいと私は斷言いたします。

日本は將來何れの國の文化の影響を利用すべきか

文化にはいろんな種類があります。日常の事なら亞米利加、經濟方面を有効にしようとするならば亞米利加に學ぶ所は多い様です。併しそれは下級の文化であつて、人間はそこで満足出來ません。眞に人間をよろこばせる文化は、誰もいふ様に、亞米利加にはありません。日常生活以上に人間を満足させる文化は米國には多く無いと云つて過言ではありません。然らば歐羅巴で假りに獨逸・佛蘭西・英吉利を並べて、何れを取るかと申しますと、人によつて別だと思ひますが、私の感じを申しますと、今之を各國

の都市に就いて比較して見ます。

街といふものは、その國の文化の産物でありまして、京都と東京、鳥取はそれ／＼違つて居ります。街の興へる感じを比べてみますと、ロンドンには商賣の都市、ニューヨークは大工場の都市、ベルリンは科學的都市と云ひ得ませう。獨逸の街は水道でも道路でも家の造り方でも科學的に出來て居ります。けれども、都市といふ位の名前で、日本の「みやこ」といふ言葉を興へるにはもの足りません。我が日本の「みやこ」といふ言葉を興へられるものはパリーの都です。若し、形容をつけるなら、パリーは人間の都です。斯く四つの都市を並べますと、違ひがよく感じられます。西洋にいらつしやいました方は、大體この感じには御賛成のようであります。獨逸の學者も亦巴里を「非常にすぐれた人間の都」と呼んで居ります。獨逸人は大體、佛蘭西人をよくいひたくないのですが。

何うしてパリーが人間の都になつてゐるか。まづ、部分的にベルリンとパリーを比べてみますと、何うしてもベルリンの方がよく出來て居ります。ベルリンでは、裏道を歩きましたが、紙屑も落ちて居りませんが、パリーでは暴風の跡のように散らばつて居ります。部分的には勝れてゐるにも關らず全體を比べるとパリーの方が進んでゐるのです。部分が如何に勝れてゐても全體が劣ることがあります。例をとれば、體操は個々の部分の効果は申分ありませんにも關らず、我々の氣持をよくするものは遊戯であります。體操は衛生的、解剖學的でありますが、遊戯は人間の爲であります。公園に例へますと、ベ

ルリンは豊島園に當り、パリは明治神宮外苑を人間的に軟らかくしたものです。ベルリンに居りますと肩が凝ります。佛蘭西へ行きますと肩の荷を下した感じですよ。この感じを私は公式に表はしてみます。

柏林：私 = 男性：私

巴里：私 = 女性：私

男性對私の關係は、親密であつて、しかも間隙があります。人間の心に、しんみりと感じが來るのは、女性に對した時であります。

學問——哲學で兩者を比べますと、哲學と一口にいへば哲學は獨逸であると思つてゐますが、その獨逸の哲學は或る所迄行つては、人間の心の極く奥底には觸れないで止つて居ります。佛蘭西の哲學は人間の中心に觸れてまゐります。明治維新後、西洋文明を輸入しました。佛蘭西文化を輸入しようとしたのですが中止になり、亞米利加、英吉利から、その後獨逸から輸入しました。今では佛蘭西の教育法も紹介されて居りますが、繪や小説以外に我々の廣い教育方面には入つて來なかつたのであります。日本に獨逸哲學が講ぜられてから四十年になりますので、譯書も原書も澤山讀まれて居ります。にも關らず獨逸哲學は日本民衆の意識に入つて居りません。試験を受ける爲や職業の必要から學ぶせいかも知れません。併し、それには一つ足りないものがあるためです。獨逸哲學にはソンテイマン（洗練された感

情)が入つておないからです。佛國ではこのソンテイマンの上にあらゆる文化が発生して居るのです。繪でも建築でも、これが人間味の入つたものにして居ります。これがあらゆる文化の基礎になるのであります。そこで歐米の文化を受け入れて、日本の文化をもつと濕ほひあるものにするには、佛蘭西文化を受け入れたらばと私は考へてゐます。若し將來眞の文化を外國に學ぶならば、佛蘭西文化を學び度いと思ひます。以上で滯歐所感の一端を終り、これから本問題に入ります。

歐羅巴の精神科學界の基本潮流

學問は學者の心、心の奥の方の氣分から生れます。だからよろしい學問は、よい人間からでなくては、生れて來ません。繪でも眞によい繪は、よい人から生れます。ミレノの様な人でなくては、ミレノの様な繪は描けません。その氣分は學者の基本潮流です。この精神科學界の氣分を見ますのには、如何なる學者を見るかが問題になります。學者の中にも上智・中智・下智と種類がありまして、大體を見る時には平凡學者を以て見て行かなくてはなりません。併し、此處では上智學者をのみ見ることにします。それではその上智學者は誰が定めるかといふと、外國で評判を聞いたたり、私が會つたり、著書を読んだりしてよいと定めたのであります。それ等の學者は今日如何なる事を研究の目標にしてゐるかと思つと、人間の心の中の本質は如何なるものか、それをありのまゝ知りたいたい有りのまゝの姿を捕へた

いと念じてゐます。かくして研究の潮流を形式的に、概括すると、從來よりも非常に研究が深刻になつて來ました。研究對象が從來よりも根本的になりました。心理學でいへば、本能の問題から感情意志の研究に入つて來ました。従つて研究方法が從來よりも深くなつたのであります。少し前迄は、自然科学的、統計的、數量的、實驗的な方法でありましたが、子供の心を味ひ體得して見ようとしています。人間の心の中の眞の心とは何ぞや換言すれば、昔から與へられた問題でありますが「人とは何ぞや」であります。靈を持つた人とは、生物學で考へる人とは違つた、又動物とは異つた生命を持つた人とは、如何なるものかを問題にしてゐるのであります、これの研究が哲學的人間學であります。

哲學的人間學

これを最近に問題にしたのは、二三年前に亡くなつたケルン大學のシエラー教授と、現フライブルグ大學教授ハイデッガー教授です。ハイデッガー教授はその講義「獨逸の理想主義と現代の獨逸哲學の苗床」に於て、獨逸哲學の根本問題は、「人間は何か」、「存在とは何か」の二問なりと論定しました。日本でも、ものゝ存在に對して深く考へる人が出て居られます。商科大學の畏友山内得立博士の「存在の現象形態」はこれに應じようとした著作でありまして、獨逸哲學界の中心問題と氣脈を通じたものであります。而してそれに答へるには「人とは何ぞや」が分らぬと解けません。カントも亦晩年に四問題とし

て、(一)人は何を知ることが出来るか、(二)人は何を爲す可きか、(三)人は何を望むべきか、(四)人は何ぞやを提出し、この前の三問題の鍵として第四問題をまづ問題にしました。カントは大學でもこの講義を度々して居ります。學問中の根本の問題は、最後は人間本質の問題に移つて來ます。大抵、人間はものを考へたり爲たりする時は、最も重大な事は詮議せずによく分つて居る自明の事として出發しますが、何かに打つつかつた時に、この自明と思つたものに疑を抱くに至るものです。男女が結婚します前には、「女とは何ぞや」「男とはどんな者か」深く追究致しませぬが、何か事が起ると始めてこの「何ぞや」を問題に致します。教育も亦然りて、青年とは何ぞやが分らなくて青年教育は行はれて居ります。が、青年教育が行き詰ると「青年とは何ぞや」が問題になります。小西重直先生は「教育の本質觀」を出されました。小著ですが教育體驗を書かれた貴重な深い御研究であります。そしてこの學說の根本になつて居るものは、人間の人間たる所以を人の靈的作用に求めて居られます。畏友篠原博士は「教育は自然の理性化なり」と申されます。これは教育學上重大な命題であります、而して篠原博士のこの自然と、理性とが、如何なるものかが、非常に大切な概念でありまして、それが不明だったり、違つてゐれば間違つた教育學になります。今の歐洲精神科學界は、かくの如き重大なる學問の前提とされてゐるのを、鎚でたゞ直して見ようといふのが、今日の學者の氣分なのであります。

これを實際教育で申しますと、今一幼兒を托せられたとします。先づ體を丈夫に強健に、何んな仕事

にも堪へられるようにするには體の中の如何なる點を如何にするか、肺や心臟や筋肉は特に大切だから、この器關を斯々と答へられるにしても、心の方を尋ねられては、體の場合程簡單には答へられせん。普通の心理學は個々の機能はよく記述してありますが、讀後、「儲子供は何んな者であらう」と考へた時多くの書物は、之に解答を與へてくれません。教育書の方では幾らか書いてあります。子供は活動的だ。然らば活動的だから何うしたらよろしいか。活動的だから成るべく活動させておくといふだけなら、猿の教育も同じことであります。子供の悪い方面を見る人は、子供はいろ／＼取り止めもないことを言つたり爲たりする。だから抑へるがよいと云ひます。佛蘭西の宗教方面の人は此の法を取つて居ります。明治八年に外國人が京都に開いた幼稚園では、子供の手に負へない方面を條項にして書き並べてあります。明治九年に出來ました當幼稚園のはそうでなく、固有の心意、情緒、善良な行爲を何うするかといふ方で、保育法を條項にしてありました。

少し以前の、子供の教育書、或は文士の書いたものを讀みますと、子供は純なものだから、純に仕立上げよう、天真爛漫だから天真爛漫に教育して行かうと説いてあります。子供の天真爛漫とは何ういふのであるか。低い意味では、正直なこと、欲するまゝに言行するといふのでせう。その通りならば夫も鳥も同様に天真爛漫です。其の點を伸ばすなら、教育的でも何でもありません。大人は偽りを澤山持つて居りますから、子供の純を尊重するのです。本能のまゝに振舞ふので、天真爛漫だといふこともあり

ますが、本當の天真爛漫といふのは、もつと子供の奥にある眞の人間性が時に表現する。之を天真爛漫と呼ぶのです。それを見つめて、伸ばして行かうとするのが、其の教育です。故に教育的に本當に伸ばさうとするものは、何であるかを見なければなりません。

又、子供は好奇心のかたまりだから、これを伸ばせば學者になると云ひます。亞米利加の學者は之を度々問題に致します。好奇心で外界を取り入れる、いろんな智識を取り入れるのですが、智識はよく用ひれば役に立つけれども、悪くも用ひられます。智識そのものは教育直接の目的にはなりません。必要缺く可からざるものではありませんけれども、それだけでは足りません。その智識を統一するものがあつて、始めて役に立つものになります。好奇心から質問する、質問するから只答へて智識を興へてやつた。好奇心を満足させたのみで、教育が出来たと思ふと間違であります。智恵がついただけでは足りません。この智恵を普通の智恵にせずに、叡智に變へなくてはなりません。本當の智恵は人間の爲にもなり、自分の爲にもなる意義ある良き智恵です。使へば使ふ程ためになるもの佛教で「良智」といひます。普通の「才」があるといふだけでは困ります。人のため自己のため意義ある良智良才にならなくてははいけません。只の智恵を良智にするには、子供の心の奥にそれとは異つた芽が出て來なければなりません。この中心のものを目覺させないでは本當のものでありません。これ呼び起すには如何にするかが人間學です。大人の斯様な研究が哲學的人間學であり、幼兒の研究の場合には哲學約幼兒學とな

るのであります。研究は唯の研究であつてはなりません。眞に意味深い研究でなくてはなりません。

現代程今申したような研究が、大切な時代はありません。ペスタロッチも「何故人は人を研究しないだらう」と言ひましたが、今日程歐米學界の一流の學者が一致して此の問題に打ち向つたのは、過去の歴史には見ない所であります。

さて、如何にして人の本質を認めて行きますか。これをするには研究者が自分を深めて豊富にして行くことが前提で、自分が淺薄貧弱では研究に入る資格がありません。何故ならば人間の本質を自分の中に見るのであります。而してそれが自分の内に見えましたら、子供の表現、言行、話を通じて、子供の本質を見ることが出来ます。子供の本質は多くの場合、普通の時よりも、特殊の場合に見られます。一旦緩急ある時に見られます。

各國學界の現状

佛蘭西では昔から心理學と社會學が勝れて居ります。殊に社會學にはすぐれた學者が出ました。サンシモンが社會學の芽をこさへたのです。マルクスはフランスに學びましたが、彼の思想の主なものもサンシモンに養はれたと申されます。何の學者にしても佛蘭西では一方に深い心理學者であり、或は社會學者であります。今迄は心理學界と社會學界とは獨立して居りました。最近には兩者が聯合しまし

て、人間と人間の作れる社會とを研究して居ります。兩者が離れて研究したのではいけない、社會學を研究するにしても、心理學研究に立脚して居なくてはならないとするようになりました。斯様の狀態で何んな方面に學界が進んでゐるかと申しますと

佛蘭西を指導して居る二人の學者のことをまづ申上げたい。それはデカルトとパスカルであります。この二人の思想を頭に入れて置かぬと現在の書物が良解出來ません。デカルトは理智に長け、パスカルは情の人であります。人間は理智と情との両面がなければなりません、人間の生活の根といふべきは情で、情から理智は芽を出すのであります。情と理智を抱擁させたような人がベルグソンであります。日本ではベルグソンは忘れられて居る人ですが、佛國では、今日でも非常な勢力です。

米國は、現在の生活を愉快にし、感じよくするのが目標で、學界もその目標で實際生活に役に立つような研究を致します。一昨年萬國心理學界が亞米利加に開かれました時、千百人許りの出席者中歐洲からの百人位を除いては殆んど米人でありましたが、種々な研究報告が四百種に上つて居ります。その問題はいろいろありますが、その間に何等の關係はありません。社會の廣い範圍から提出された種々の問題の解答であります。教育界、工場、實業界等から現實の問題を捕へて解決して居るのであります。所が最近開かれたウキーンの獨逸心理學界での問題といふものは、學說中心であり、その學說の解決のために研究がなされてゐるのであります。然しこの實用を主とした亞米利加でも、一部の人は、自覺し始

めまして亞米利加の様な學問では學問とは言へない。學問にするためにはもう一度反省しなければならぬ。行動心理學にしても、行動とか刺戟、反動といふものがはつきり考へられてゐない。その事から考へ直して行かなければならぬ」とデューキー教授は述べられました。ハーバート大學のボーリングも「實驗心理學の歴史」の序文に面白いことを書いて居ります。「實驗心理學の歴史は千八百四十年のフェヒネル當りから書き出せばよいと思つてやり出した所が、其處からでは出来ないことが、明になつて、デカルト當りに迄さか上らなければならなかつた。今迄、亞米利加は哲學素養が足りなかつたと思ふ。これからは此の素養がもつと必要だらう」と。これは一段と深まり自覺し始めた傾向であります。亞米利加ではデュラントの書きました「哲學の話」が日本の山間の驛店でキングを供へてある程度に普及して居ります。亞米利加の精神科學界も從來より深刻化しかゝつたのであります。

露西亞は、全く心理學——主に生理的心理學が研究中心で、精神の問題が殆んど入つて居りませんが、最近モスコウでヘーゲルやマルクスの認識法から、心理學を一層深く研究せんとする氣運が起つてゐます。

以上申し上げました様に、大體西洋の學界は、今日枝葉の問題よりも根本の問題に入らうとする傾向になつて居ります。日本でもこの數年來の著書にその現れが見えます。

結 論

かくの如く學界が變化して深刻するとは、人間が深刻化せんとしてゐることでありませう。學問が深くなると、それが機縁で、人間が深くなり、人間が深くなると、諸種の文化的仕事も深くなります。今日は學界一流の人々の學的氣分を話したのでありますが、この學的氣分が一般に廣く擴まつて行くと、教育界も又深化するに相違無く、従つて幼稚園教育も今迄よりも深刻化して來るに違ひありません。近い將來に今日も話したこの學界の氣分が、實際方面に入つてまゐりませう。この氣分で實際に當りますと、教育の上にも必然的に變更が來なければなりません。終に甚だ抽象的な話で、御満足いたゞけぬ事と思ひますが、それは私の力の及ばぬ所至らぬ所で、専心御寛容を請ふ外はありませぬ。御静聽をわすらへませぬことを深く感謝いたします。